互いに、長い間友人だった異性がいた。しかし互いに、その相手は恋仲としてはまったく不向きだった。男の方はまあそういうものだろう、と軽く言い、女の方はらしく泣いた。

男はさっぱりとした性格ではあったが、情に疎いわけではなかった。むしろ情に厚かった。初対面の相手にもかかわらず、男は聞き役に徹し、時には何気ない話をした。女も気を遣われていることを感じ取れないような鈍さを持ち合わせていなかったし、ラジオのようにおだやかに聞こえてくる話に興味をそそられたため、時折り質問をした。

時間はあっという間に過ぎた。ワインはいつの間にか空になった。肴のパテとチーズも無くなった。会計も済ませていた。涙だけが跡をしっかりと残している。

女に終電はあり、男にはなかった。

閉店時間を迎えたのは店主とふたりだけだった。

「時間、大丈夫？」

四十手前の女性店主が訊ねた。彼女は閉店時間を気に留めてはいなかった。会話の中に聞いた終電の時間を気にしていた。その心配は男の方にやや多く注がれた。

「俺は大丈夫です」

「そう」

嘘を嘘と指摘しない優しさを持っている店主はただそう言った。

嘘を嘘だと指摘されないありがたさを知る男は感謝した。

「優奈子さんはそろそろ終電でしょ？」

「……はい…、うん」

男に名前で呼ばれた女は明らかに睡魔に襲われている。覇気のない首肯に、男は溜め息をかみ殺す。そして一考こそしたものの、なるべく紳士的であろうと努めることにした。

「とりあえず駅まで一緒に行こう」

「うん…、ありがとう……」

瞼を重くしたままの女だったが、手を引かれるとそのままされるがままになった。

「じゃあまたお待ちしてますね」

店主の言葉に男は「はい、また」と、女は「ううん……」と目をこすった。

駅までの道はそう遠くない。しかし暗がりの道を二、三分ほど行かなければならない。素面であれば何ら問題はなく、男も紳士的な気遣いを発揮しなかっただろう。加えて、気遣う相手が彼女でなければ。

街灯の心もとなさが際立つ暗所をゆったりと歩く。店を出るまで不安定だった女の足取りはゆっくりだったがしっかりしていた。支えを必要としなかった。男は歩幅を合わせながら、隣を歩いた。

角を曲がったところで女が後悔を口にした。

「なんで付き合ったんだろう……」

店にいた時から女は何度も同じ後悔を口にしていた。
「……」
「あー……もうほんとうに……」
「……」
「なんであのままいられなかったんだろう……」
「……」
「あのままでいればまだ一緒に出かけられたのに……」
「……」
「はーあ……」
男は溜め息を我慢してなるべくおだやかに言った。
「言わずにはいられなかったのなら仕方ないんじゃないですか」
店にいた頃から似たようなやりとりをもう何度もしていた。
「でも、それを我慢できていたら……」
「あんなの、我慢できるはずがない」
荒げたような声ではない。しかし、叫ぶようだった。
それを聞いて彼女は男が自分と同じ経験を持っていることをはっと思い出す。
「……なら、仕方なかったのかあ」
「そうですよ。それに、問題はいつだって『次』だけです」
「……いいこと言いますね」
「そうですかね。ありがとうございます」
かく言う男も完全には吹っ切れてはいなかったが、女々しい面を見せたくなどなかった。
「……明日は休みですか？」
「土曜日ですから」
「じゃあゆっくり出来たらいいですね」
「えっと……あなたは何をして過ごすんですか？」
女は男の名前を知らなかった。それは女に対する男も同様だった。しかし互いに知ろうとしなかった。
「……どうだろう、家でゆっくり休むと思います」
手製のサンドウィッチを持って十時台の電車に乗り、昭和公園でピクニックをする予定があったが、男は言わなかった。孤独な読書の時間が寂しいものだと理解しながら決して手放す気にならなかった。
話している内に明るい通りに出た。そして改札までもすぐだった。
男は女が改札内に入るのを見届ける。女は改札を通ろうとしない男に対して首を傾げる。
「どうしました？」

「忘れ物したんで、ちょっと取ってきます。じゃあここで」
「え、？」
女はまさかと思ったが、男はすぐに元の道に引き返す仕草をして質問の隙を与えなかった。
「また会うときはまた別の話で盛り上がりましょうね」
「……うん、じゃあまた」
三時間以上も共に飲み続けていた男と女は、そんな言葉であっけなく別れた。

× × ×

「……かぜ」
換気のために僅かに開けていた窓から、秋風と言うに相応しい空気と喧騒が堂々と侵入していた。女は風の中に銀杏の香りを感じたような気がした。しかしそれが気のせいであることを知っている。住んでいるのは実家のような田舎ではないのだ。
「……締め忘れてた」
女は出したばかりのかけ布団に感謝する。それがなければ風邪をひいていただろう、という確信があったからだ。昨晩の内に閉めなければならなかった窓に手を伸ばし、五時間越しにやっと閉めた。銀杏の香りはたしかに名残惜しかったが、それよりも喧騒を避けたかった。
眠気はあったが二度寝はしなかった。ベッドから下り、洗面所へ。顔を洗い、髪を流し、水をしっかりと拭き取ってからヘアバンドで後ろに固定する。化粧水で顔を濡らし、リビングへ。朝食はやや熟れたバナナ二本と牛乳二杯で十分だった。インスタントコーヒーを淹れ、キッチンで立ったまま、ほう、とひと息吐く。
穏やかなひと呼吸は昨晩のことを思い出すための余白の現れだった。
そういえばあの人――真壁…亨さんは無事帰れたのかな……。
穏やかな時間のまま、女は考えた。
てっきり男にはまだ終電があると思っていたがそうではなく、終電を逃してまで自分の話に付き合ってくれたと思い至ったのは改札の中に入ってしまった後で、しかもおそらく気負わせないためにその場をすぐに去って行ったのだと考えが到ったのは振り返ってもどこにもその姿が見えなくなってしまった後だった。
また話してみたいな、とただ思った。好奇心以外の感情は皆無だった。間違ってもれ案愛勘定などはどこにもない。
女は読書部屋兼寝室に戻り、積もうと考えていた本を手に取って見た。牧野富太郎の著書『植物一日一題』だった。神保町で購入したものだった。
女はすぐに、べつに出先で読めばいいか、と判断した。そう判断したものの、コーヒーをゆっくりと飲んでから、結局は十時過ぎに家を出た。
まっすぐに目的地へと向かわなかった。昨晩飲み食いした分のカロリーを消費するため、と

いうのと昼食をおいしくたべるため、という相反したふたつの理由の元、電車に乗らずに沿線を歩いた。晴れていたので立ち並ぶ木々の彩りが青を背によく映えた。

季節はすっかり秋だった。何をもって秋を秋とするのか、と史学科の友人にかつて問われた彼女は、木枯らしが吹いたら、と答えたが、今や、私がそう感じたら、と答えるようになった。

彼女は秋を感じながら歩く。空、気温、風、彩り、衣服、自動販売機の飲料、飲食店で推されている食べ物、漂ってくる匂い、そのいづれかに秋の雰囲気を覚えたのではなく、総じて醸成される言い表し難いものを感じている。

なんの前兆もなく、彼女の前に猫が飛び出した。

「……えっ？」

彼女は一瞬そう思ったがすぐに認識を改めた。飛び出してきたのではない、落ちてきたのだ、と。あまりにも前置きが無さ過ぎて、唯一の他の可能性である上方を見た。そうだろう、と思ってそうしたわけではない。それ以外にないだろう、と反射的に考え、そうした。

そして認識は正された。

雑居ビル三階の高さにある目と目があった。

「あっ……え？」

猫がどこかへ走り去る。しかし三階の窓から身を乗り出す男は驚きのあまり固まった。

「……え、うそでしょ、昨晩の」

女は求めていた男の顔をそこに見た。そして相手と同じように固まった。

固まるのはほとんど同時だったが、笑ったのは寸分違わず同じ瞬間だった。

×　×　×

ビルから出てきた男はジャケットの上に藍色のコートを羽織っていた。

「今日、これぞ秋って感じですね」

「ですね」

階段を下りてきたその足を止めずに男は女と同じ道を歩いた。

「ねこ、あっちに行きましたよ」

そう言いながらも姿はどこにもない。

「……あらら、どこへ行ったのやら」

「探しましょう」

男はまた驚いたが、今度は顔に出さなかった。

ふたりは猫が逃げた方へと一緒に歩いた。

「今日も仕事なんですか？」

「仕事というか……手伝いか小遣い稼ぎ？」

「なにをしてたんですか？」
「えー……そんなに気になる？」
男は照れるような反応を期待して訊いた。
「はい、気になります。昨晩みたいな粋なことをする人が何をしていたのか、知りたいです」
「おぉー…そうか、そうですか……」
逆に男が照れるはめになった。男は照れを大きな深呼吸で収めてから答えた。
「映像編集です」
「意外」
「意外ですか」
「はい。だってスーツ姿ですし」
「あー……確かに他の連中はパーカーとかのラフな格好だなあ」
「なんでスーツ姿なんですか？」
女は男の服装を再度確認する様にしてから最後に顔を見上げた。そこで改めて気付いた事があった。靴もよく手入れのされた艶やかなものだった。口にした疑念がより深くなった。
「……仕事だから？」
「背筋が自然と正される、とかそういうことですか？」
「そういうこと」
「なるほど」
女はぽつりと言ったが心底から納得していた。
「わかります？」
「わかります。私も在宅の時でも家でスーツ着ます」
「在宅の仕事なんですか？」
「昨日話しませんでしたっけ」
「互いにほとんど恋愛の話しかしませんでしたね」
「あー……そうでしたね」
互いに昨晩を思い出す。
「ふふっ」
「ははっ」
また笑いがぴたりと被った。
「昼、一緒にどうですか？」
「いいですよ。肉、食いたいです」
「肉ですか」
「カレーとか、とにかくボリューミーなやつがいいです」
「意外とよく食べるんですね」

「や、単にお腹が減ってるだけです」
「朝ごはんは？」
「バナナとかちゃんと食べましたよ。ここまであまあ歩いて来たので、それでちゃんとしっかりお腹が減ってるんです。というか、おいしく昼ごはんにありつきたかったので歩いてたんです」
「なんか、いいな」
「いいってなにがですか？」
「なんというか……健康的で」
「健康的に過ごされてないんですか？　健康、大事ですよ」
「うーん、どうだろう。なるべく自炊はしてるし運動もしてるけど、やっぱりお酒結構飲んじゃうんですよね」
「昨晩もけっこう呑まれてましたもんね」
「優奈子さんの方が呑んでたでしょ。だから最後はああなったわけで」
「……」
やや長くなった沈黙は申しわけなさの現れだった。
「あ、べつになんとも思ってないですよ？」
「……でも、気を遣わせてしまってすみませんでした」
女は立ち止まり、律儀にしっかりと頭を下げた。男は慌てずに、足も止めずに対応する。
「誰にでもありますよ、迷惑かけることなんて」
女は頭を上げ、男の後を追ってまた横に並んだ。
「だから何も気にしないで下さい。俺も色々話せて楽しかったですし」
「……」
男は女よりもどこか達観していた。それを知った女は黙るしかなかった。
「そういえば、結局どうしますか、ごはん」
「おっきなハンバーグを頬張りたい気分です」
それと一緒に自分の浅はかさも。
「ははっ、いいですね」
男の海風のような笑顔により、女は一層に自分の浅はかさを恥じた。
「……ハンバーグ、すきですか」
「大好きですね。大きくて肉汁たっぷりのやつが好きです」
自分よりもずっと大人であるかのように感じていた異性が、こどものようなことを言う。
「じゃあきっとお気に召しますよ」
「やった」
さらに笑顔にさせてみたくて女は言い、男は勝手にその意図に応えた。